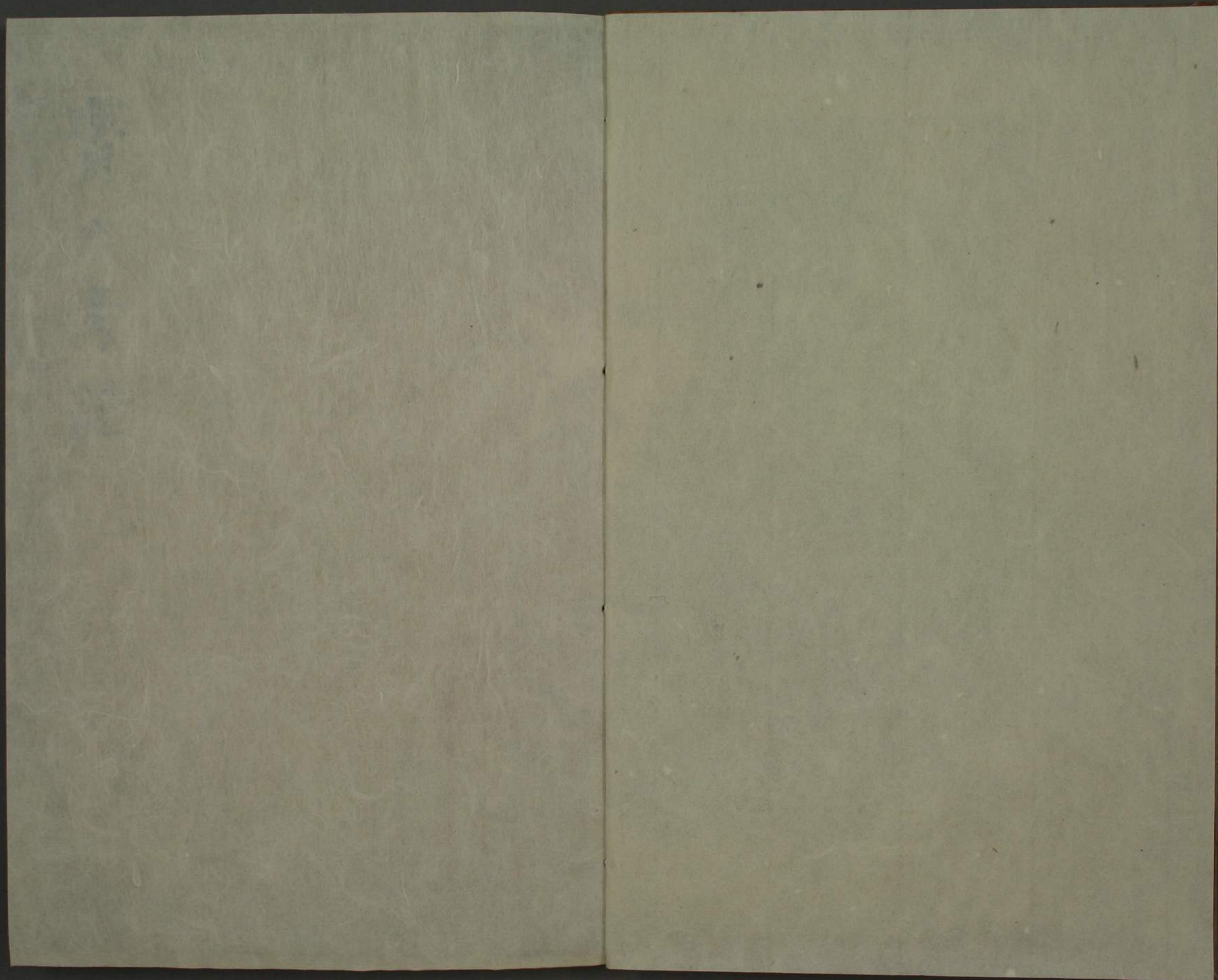


齋戸考證

大槻玄澤自筆稿本
松平貞幹書狀之通添

重文
洋学文庫
文庫8
A 19





旅
戶
考
證

大
田
一
序

近き頃諸心く折くお中よりすもあ
古きを先と記せりともありあふ多し
祭器くくしんひをさしめぬよし
のたも物を時くえしともありしは
んもやめさしけり二意の物年の
くん。奥の一の祭りもをさし
ぬらよひせし。果といふもの物
宗井部山岡お死なぬ神社の山林
中くくく下多所なり。驛中より



Blank page with faint bleed-through text from the reverse side.

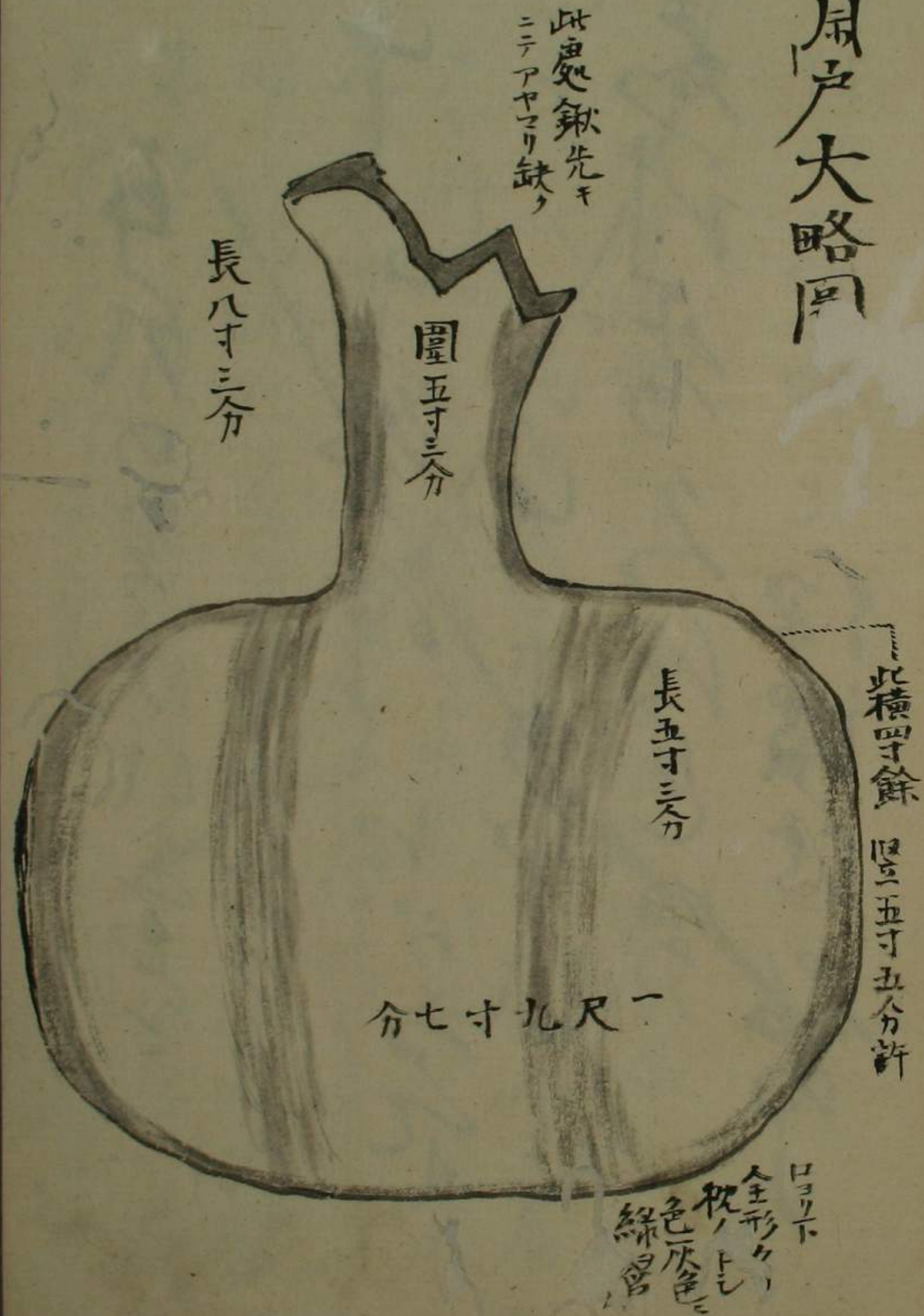
芝蘭堂諸藏

トナル

此器十八九年前奥列磐井郡西岩井山目村配志和大明神別當修驗蘭梅山日光院門前白鳥明神小祠前ノ畠中ニテ同處下々町住居善吉其地ヲ^{サテ}聖テ偶々獲タリ享和三年癸亥六月同邑西山巖記ス

文化十四年丁丑冬コレヲ磐水翁ニ贈ル今

麻戸大略圖



此處缺先キニテアヤマリ缺ク

長八寸三分

圍五寸三分

長五寸三分

一尺九寸七分

此種守餘 堅五寸五分許

ロソト 全形ク 秋トシ 色灰色 緑色

なり

○しるふ 日本紀万葉集より知る日本紀
知字萬葉集の鎮座用と云ふ事を知りしより之を
同系なりと云ふ事と云ふ事なり神を祀る事と云
ふ事なりと云ふ事なり凶と云ふ事なりと云ふ事なり
と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり○神代記
齋主神 イハヒコノミ 又云伊弉諾伊弉册と云ふ事なり
子の事と云ふ事なり生名事なりと云ふ事なり
と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

○しむべ

日本紀不忌部と云ふ事なり
○今の子の事なり
備前の志部と云ふ事なり
天太皇命此後也と云ふ事なり
改志部為齋
部と云ふ事なり

○いつべ

日本紀の嚴分と云ふ事なり
といふ事なり
高信神も亦是なり
釋が上
部といふ事なり
高系と云ふ事なり
時色と云ふ事なり

○いづ 皇代記 嚴とらえり 氣出の義ありし
一説は稜威此云伊都と云ふ古事記より伊豆と
ちり伊豆の處をこのまじりしつくりし雲雲記は
儼然とつくりしと云ふ

△白石先生東雅

よ右の所は地を掃ひ齋場と設けし神と齋を祀
儀ありし齋場は「エニハ」といひし
嚴瓦 日本紀釋よりイツベ祭神 土器の徳名なり
崇神天皇紀の「瓦も嚴瓦のまじりしつくりし

イムといふ器なりしつくりし器なり
又古くは器をスヤキといふスハ陶器なりヤキハ磁器なり

又曰舊事記神武天皇紀天ノ香山の埴をもて八十
平瓦 天ノ手扶八十枚 嚴瓦を修り給ふと
又云べといふ上古に俗凡器を呼ひし物なり 嚴瓦
後てイツベといひ忌瓦後てイムベといひ火瓦後て
ホノベといひ埴をナベといひ罐をツルベといひしと云ふ
器なり

又云土器 カハラといふ瓦なりは筭なり古くは

天正感宝
元年七月
其利聖
武天皇
敬皇云々

何ノ據ナキナリ思フニ行基按二第四代元天自天長元年七月和泉國按二第百四十四代元天自天長元年七月家原寺アリ

雜説タルハ此陶山ハ最古キト知ラレ既ニ舊事記ニ第

淳縣今和泉國ニ屬ス大山社トイフ神陶器ヲ作ル見エシコレ

陶山陶器村ノ名ヲ命シタル根源タルハ其行基燒ヒ哉

未傳説スルハ無稽ノナリ又鴻物ト目利シタルノ説ハ我

邦ノ古ヲ不知者ノ説ニ唯形トエノサマニテイヒタルナリ取

ニ足ラス論ニ及ヌナリ其ハホリスエト鑑定シタル人ハコレ

古ヲ知ル者ナリ所是假初二曲玉壺ト名ルモノニシテ其内

ニ曲玉或ハ管玉或ハ白玉或ハ彈丸或ハ異狀ノ金具上代用ル所ノ等アル物ト見ユル

カ故ナリ但シテ十二八九ハ空虚ナルヲ多シ近年諸國ヨリ種々

異形ノ陶器ヲ掘リ出スナリ尤形状大小各々等シカラス多ク

底丸シ一平ナル者ハ少シ或底平者アリ又口無キ物半體ノ

物五口十口ノ物アリ此皆上古神事祭祀ニ用アリ者ナレハ

今ノ人ノ心ヲ以テ上代往古ノ事後ノモノリ測リ知ルハカレ

ナリ爰ニ其事跡ヲ尋クコレ等ヲ以テ其古俗ヲ思察

スヘシコレ好古家ノ考證一助トナスベキノミ

ナリ爰ニ其事跡ヲ尋クコレ等ヲ以テ其古俗ヲ思察

スヘシコレ好古家ノ考證一助トナスベキノミ

出雲國造神賀辭曰。伊都閉黒益閉トイフ。

天能張和爾齋許母利互。祈年祭祝詞曰。

張閉高知張腹滿雙魚。張酒釀スカメナリ古

酒釀タル張ナカラ神ニ奉名故ニ斯克イフナリ

萬葉集ニ 哭澤之神尔三輪居。又祭神歌イハヒヘ齋戶

乎前坐置。又齋戶乎齋穿居。ナト讀マリ皆同キ

○日本書紀第廿三代雄略天皇紀曰。十七年癸丑春三月

戊寅令土師連等造清器。同日丑朔戊寅詔土師連

使進應盛朝夕御膳清器者。於是土師連祖吾等。

仍進撰津國來狹狹村。山背國內村。倭見村。

伊勢國藤形村。及丹波但馬因幡私民部名

曰ニ贊土師。卜部。アリ今此子孫伊勢一志郡上

野村ニアリ又土師住ト云地アリ古陶器ヲ堀出スアリ

土人ハ黒土ノ御器トイフコレ實錄ニ出タル據ノアリ

ナリ。茂實按ニ丹波龜山モ龜山ニテハアルマシキカ和名録ニ丹波

天田郡ニ土師ノ名モ見エナリ又國ノ龜岡龜田龜沢ナトアルモ

龜ニテハアルマシキカ龜ヲヤキ出セル地名ナラシカ平賀トイフ在名モ恐ク

平賀ナレカ芝陽ノ話ニ丹波ニテハ所々ヨリヒラカイツベノ類ヲ堀リ出ストナ

レハカタクコノ思考ニ及リ

又木内氏ノ説ニ因テ史徴雄畧紀ヲ閱スニ註。通證曰。凡飲食御器以土器為

貴。陶器為清此遺風耳。○神名式。能勢郡久佐神社。通證曰。神社

今在嵯野村。村民今猶作土器。傳名録。綴喜郡宇智。祐之案。

伏見北深草地。今造土器。蓋其遺。通證曰。今屬一志郡。山人云。間
掘古陶器於田野。倭名敘。天田郡土師。倭名敘。出石郡埴野。○
神名式。因幡國高草郡大野見。宿禰神社。漁梅。重仁天皇。以野
見。宿禰。鳥土師。疑高草郡。當時造陶器之地。

以下後發
如所 ○神武天皇記 卅九

是夜自祈而寢夢有天神訓之曰宜取天香

山社中土以造天平瓮八十枚并造嚴瓮而

釋曰。算方案。平賀者。盛供神物之土器。今世伊勢太神宮御殿下。多以安置。或說諸神參假神座。嚴瓮。嚴皇義。瓮者。土瓶云云。凡嚴瓮者。祭神土器總名。

敬祭天神地祇云云。一一宜今當取天香

山埴以造天平瓮而祭天社國社之神云云

於是天皇甚悅乃以此埴造作八十平瓮天

手扶釋曰。通證曰。手扶以手指別扶也。土器

八十枚嚴瓮而陟于丹生川上通證曰。丹生

野山遠丹生社前用祭天神地祇則於彼菟

流入宇智郡者田川朝原譬如水沫而有所咒著也

田川朝原譬如水沫而有所咒著也

天皇大喜乃採取丹生川上之五百箇真坂

樹以祭諸神自此始有嚴瓮之置也通證曰。後世軍

陣出門時必設備此物以禮祭神祇謂之嚴
茂實曰嚴瓮之置後世軍陳出門の時設備ありしはこれなり
の傳也

右史徵抄錄

萬景集

○伊波以倍七
卷之二十一
卷之二十二
卷之二十三
卷之二十四
卷之二十五
卷之二十六
卷之二十七
卷之二十八
卷之二十九
卷之三十
卷之三十一
卷之三十二
卷之三十三
卷之三十四
卷之三十五
卷之三十六
卷之三十七
卷之三十八
卷之三十九
卷之四十
卷之四十一
卷之四十二
卷之四十三
卷之四十四
卷之四十五
卷之四十六
卷之四十七
卷之四十八
卷之四十九
卷之五十

大伴坂と郎女祭神歌一首并短歌
オホトモ サカノノイサノメ
依伊大納言存也社まの
女を祭る人の姓

久堅之、三皇後、 去来 神之命、 奥山乃、賢

ひさかたのあまのついで、あまのついで、
木之枝爾、白香附、 木縣取甘而、齋戸字、 忌、 身居、

竹五年、 盤二爾、負垂、 十白物、 勝抗伏、 手弱也、

押日取懸、 如此各、 吾者、 祈奉、 君、 雨、 不相、 可、 聞、

あまひとを、 かけ、 ついで、 ちも、 くれ、 こと、 ひな、 び、 とも、 みる、 あ、 ぬ、 じ、

齋戸註説

神の命、大伴氏祖、天忍留命、
ひさかたのあまのついで、
木之枝爾、白香附、
竹五年、盤二爾、負垂、
十白物、勝抗伏、
手弱也、
押日取懸、
如此各、
吾者、
祈奉、
君、
雨、
不相、
可、
聞、
あまひとを、
かけ、
ついで、
ちも、
くれ、
こと、
ひな、
び、
とも、
みる、
あ、
ぬ、
じ、

反詞

木綿疊手取持而如此谷母吾波乞常君爾不相鴨

ゆつゝみでふとくももちて、かくいふはんかといふむもみよあつたも

木綿のてし織る方をとてみくもよさゆく神もなごころの抱望

あふむふふのたとほてあふく、乞なむもち多よ者と月づくこひ

のむい常の傍字

右歌者以天平五年冬十一月供祭大伴氏神之時聊作

此歌故曰祭神歌 卷四の古記に郎女初穂積皇子よりてられ

しと、皇子豊後大伴宿奈麻呂の妻とたりて、故上大嬢子と田村大

嬢子を生む、然るを後に宿奈麻呂の田村の家にお住せしむ

故上の家は住しる者、は時の祈なりと云わあふむ

○石田王卒之時丹生女王作歌一首并短歌 々々並字

脱し重、日録より丹生王と名、二王ともい傳しれむ

名陽竹乃十縁皇子、狭丹類相吾大王者、隱久乃、

かやくけの、とらとらみこさふづらふ、わづおろまみかよまの

始瀬乃山雨、神左備雨、伊都伎坐等、玉梓乃、八曾言

げつせのやまたに、かんさびふ、いつきいもももとたまつさめいとい

鶴於余頭禮可吾聞都流、枉言加 我聞都流母、天地

つゝたよづれうわづもつゝるまのさとう、わづまつゝるもあつち

雨悔事乃、世間乃、悔言者、天雲乃、曾久敬能

ふ、くやしまことこのちの、くやしまこと、あまぐもものそ

極、天地乃、至流左右之、杖策毛、不銜毛去而夕衢占問

おのふさの山のかき墓をりし

反歌

逆言之、狂言等可聞高山之石穗乃上雨、君之卧有
おとづれのまのこころやまのソモのこころふまひつ
こころ奇よけ余頼れ狂言としひ、そか狂言はまじ
はまおよづれい逆言をすのこころしむいころし天
智紀妖偽の字をたよつれとあつと字書しつふも
べし、いれれも狂の誤なるとしつりつりつ何と
せんらのさこ

石上、振乃山有、杉村乃、思過倍吉、君爾有名國

いそのふみふまのやまはふるまもむむの、ゆりいもいふま
かたせしふ

右巻と下巻

右巻の山も思那、おの思ひこころまといもむ序のこ

天平五年癸酉遣唐使船發難波入海之時親母贈子歌
一首并短歌 續紀天平四年八月以從四位上多治比真人廣成為遣唐

大使從五位下中臣朝臣名代為副使判官四人録事四人云々、
同五年三月節刀を授四月遣唐四船難波津より發る

者此人のころの母のさかきか

蘇茅子乎妻向鹿許曾二子二子持有跡五戸鹿兒自物、

あまはぎを、つらやあを、ひんごらで、さうとくから、あ、

吾獨子之枕枕客二師 狂者 竹珠乎密 貫無

齋戸爾木綿取四手而忌日管吾思吾子真好本有欲得

いひふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

〇〇 齋 齋

〇〇

奴者多本奴吉本

元曆中奴を好ぶ

鹿子つらつら

多意を

錢の平

り

及歌

一首 畧

右巻九

大伴宿禰家持以天平十八年閏七月被任越中國守即取七月赴

任所於時姑大伴坂上即女贈家持歌二首

續紀天平十八年六月壬寅家持を越中守となす

九月 閏

伊波比倍

久佐麻久良多妣由久吉美乎依伎久安禮等伊波比倍須惠

都安我登許能辭爾

久乃

毛世

孫立

之る

多事

伊麻能其等

半須流邊乃余左

い

君が

以後

右巻十七

一首

追痛防人悲別之心作歌一首并短歌

天皇乃等保能朝廷等之良奴曰筑紫國波安多麻毛流

おほまのりかのみのとくちをぬひつりのふいあたたまる
於佐倍乃城曾等聞食四方國爾波比等佐波爾美知互波
あとのまげとまこしをともものくにひびきみちてい
安禮杯登利我奈久安豆麻乎能故波伊田乎可比加弊里
あれどとくちなまあづまのこいつてむらひかたり
見世受互伊佐美多流多家吉軍卒等禰疑多麻比麻氣乃
みせとていみたるたけいこゝねぎたまひまのゆの
麻爾麻爾多良知禰乃波波我目可禮互若草能都麻乎母
まにまにたらねのはいめかれておろこのつよひくも

麻可受安良多麻能月日餘美都都安之我知流難波能美
まうじであらたまのつよひのみつあーあちるなかの
津爾大船爾末加伊之自奴伎安佐奈藝爾可故等登能倍
つおほおねにまうやぬまあさかぎにかこそしの
由布思保爾可知比伎乎里安騰母比互許勢由久伎美波
ゆふしほおかぢひきをりあまひこいぶゆここの
奈美乃向乎伊由伎佐具久美麻佐吉久母波夜久伊多里
なみのものをいゆきささくみまこまこはやくしたる
互大王乃美許等能麻爾末麻須良男乃許已呂乎母知互
ておほまのりかのみのとくちをぬひつりのふいあたたまる
安里米具里事之乎波良婆都都麻波受可敵理伎麻勢登
ありぬらりこしをぬひつりのふいあたたまる

〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇

さうして後河原根木の根...
よまにまふしに一同いあつるを...
四りて良の下波を...
よらび六息を...
あてはせ七カも...
いしあつあつ...
神ふり...
とらふ...
とらふ...
とらふ...

反歌

麻須良男能由伎等里於比豆伊田豆伊氣波和可禮乎
予之美奈氣伎家牟都麻
ましらあめのゆき...
ましらあめのゆき...
ましらあめのゆき...

等里我奈久安豆麻乎等故能都麻和可禮可奈之久安里
家牟等之能乎奈我美
とらふ...
とらふ...
とらふ...

あては...
あては...
あては...

右二月八日兵部少輔大伴宿禰家持

右巻とてし音

河國安修部之塩生坂上総玉塩生部塩生又
 塩石美濃國池田部之生加茂部之塩生
 伊勢之飯高部之丹生上野國其樂部之丹
 生若狭之遠敷部之丹生丹布安藝之山縣部
 之生又野別之生上生亦同之生忌部ハ
 即忌部イムベ焼之々々旧代之々々出雲之志
 字部之志部又備前之志部志部之
 々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 伊ムベヤキとは捕之々々々々々々々々々々

昔々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 那上師和泉大鳥部上師波爾等和名物
 又为大和部之部之部之部之部之部之部
 あり々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 按第廿一代重仁天皇三十二年癸亥秋始代殉次塩輪の次野見宿
 福為土部紀日秋七月日葉酸媛命臨葬有日為天皇詔群卿
 日從死之道前知不可云々野見宿進
 出雲國工部一議便車日奏之則使者禰進
 造作人馬及種物献天皇云部仍號此上
 物謂塩之功亦賜銀地即任上野因改
 見宿禰之功亦賜銀地即任上野因改

本姓詔也所部野見是土部連等主天皇喪葬
也○祐之梅土部即土師云云野見宿禰
者出雲國人也系曰天德日命後菅原氏
祖有云云之事奪當麻蹶速之地悉賜野
見宿禰云云

又按野見宿禰之考も人々として野人の土作と云ふ
し、彼意字郡忌部の上作等々々々し祐之因幡高草郡多志
との考前之云々

見多氏菅原の事子孫を証せしる也土師の姓
菅原の祖は野見宿禰の孫なり重仁天皇
の御時より古風尚抄りて華元節々人死
されば多々殉葬す可し皇孫崩る多野見
宿禰妻曰殉臣の事一國を憂へ一人を別ぶの

土師の仁政よみしと云々土師三百余人を

むきひ自領して塩土ととり諸地の能く造
りて其の事皇孫膏感と云々是後因ひて殉
人なれりけり云々土師の姓は

賜りし事云々後大和菅原の里の名なり後ひより
土師と改め菅原の姓とすこれ光仁帝
の御時なり

又按し和名も陶器村の和名抄らむを須惠陶
字一し備前邑久部もは名あり國列南山古墳の
名もあはれ給ふ事云々後々々々

石田 句 村 同

斎藤 子 申 申 申 申

申 申 申 申 申 申 申 申

乃 若 龍 平 之 龍 之 龍

申 申 申 申 申 申 申 申

水 一 斗 余 力 上 登 之 力

申 申 申 申 申 申 申 申

少 物 之 申 申 申 申 申 申

申 申 申 申 申 申 申 申

申 申 申 申 申 申 申 申

申 申 申 申 申 申 申 申

申 申 申 申 申 申 申 申

申 申 申 申 申 申 申 申

申 申 申 申 申 申 申 申

申 申 申 申 申 申 申 申

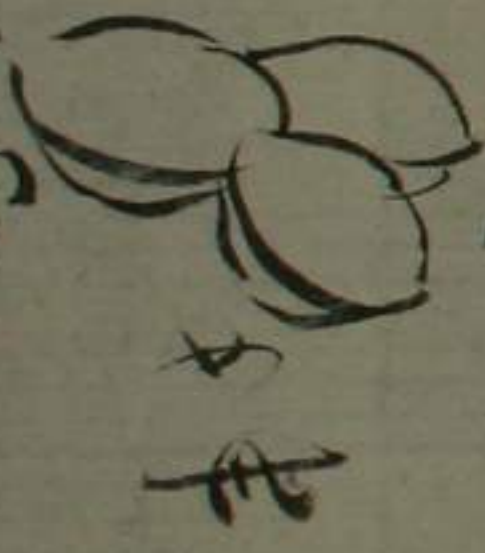
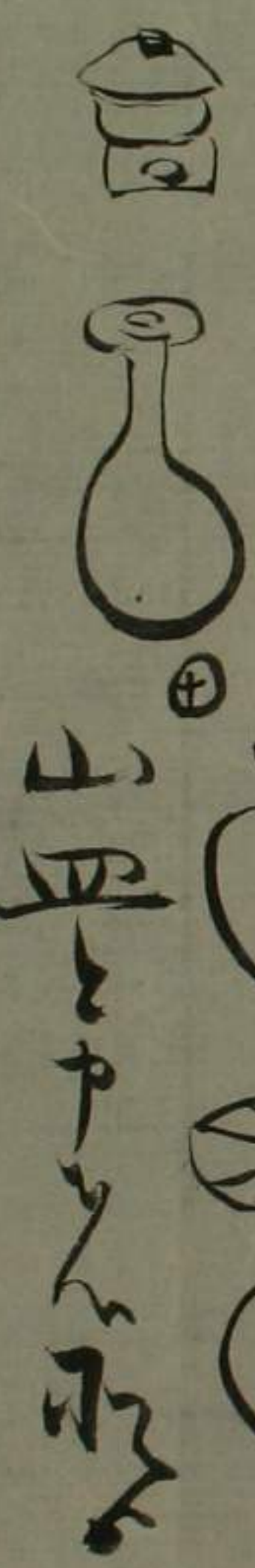
申 申 申 申 申 申 申 申

申 申 申 申 申 申 申 申

申 申 申 申 申 申 申 申

合 員

申 申



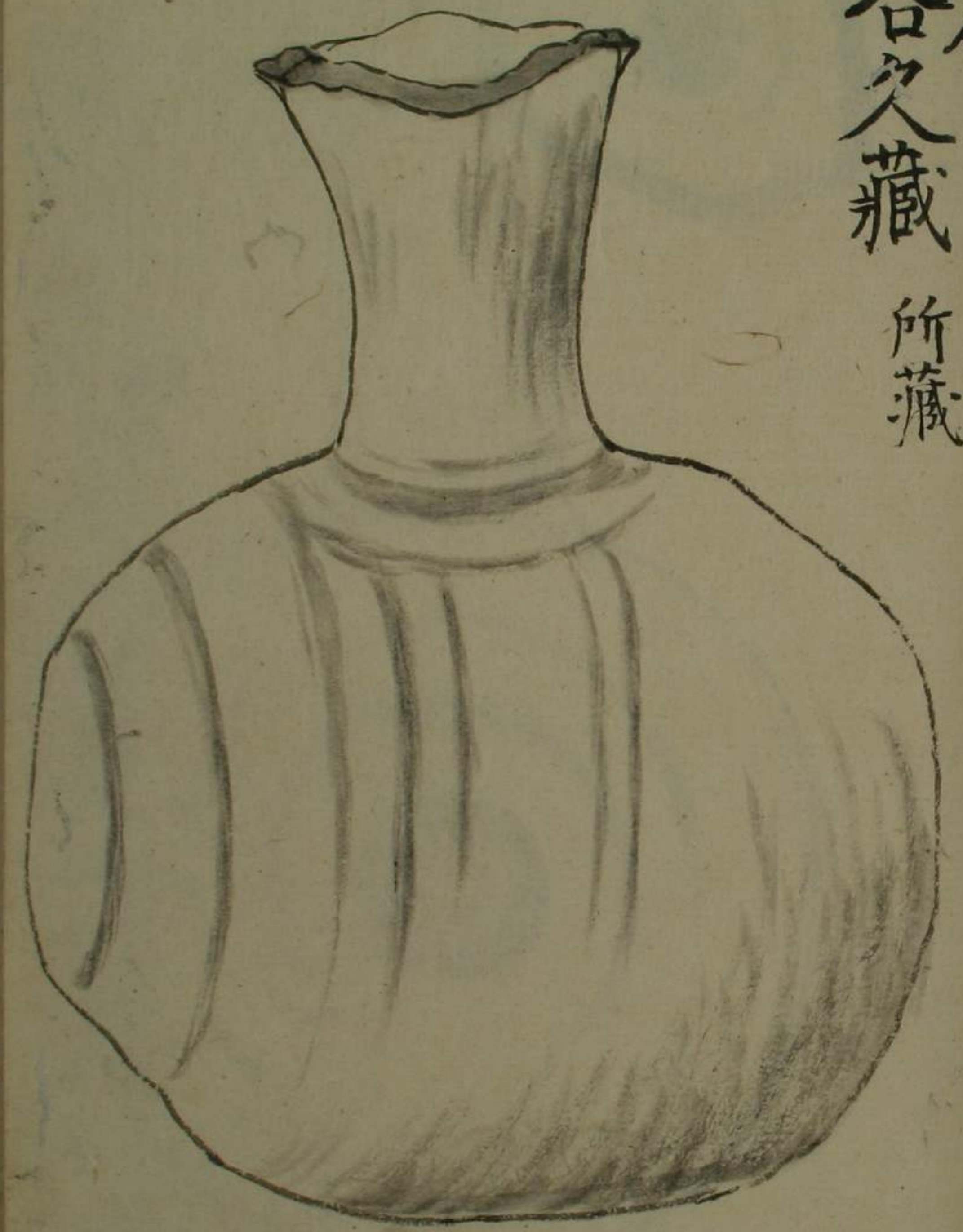
○霜月某日 日終の一器ヲ 佐々木と為金銀に
 村井と云ふ所^口。國々物々同^口。形也但古色なりし

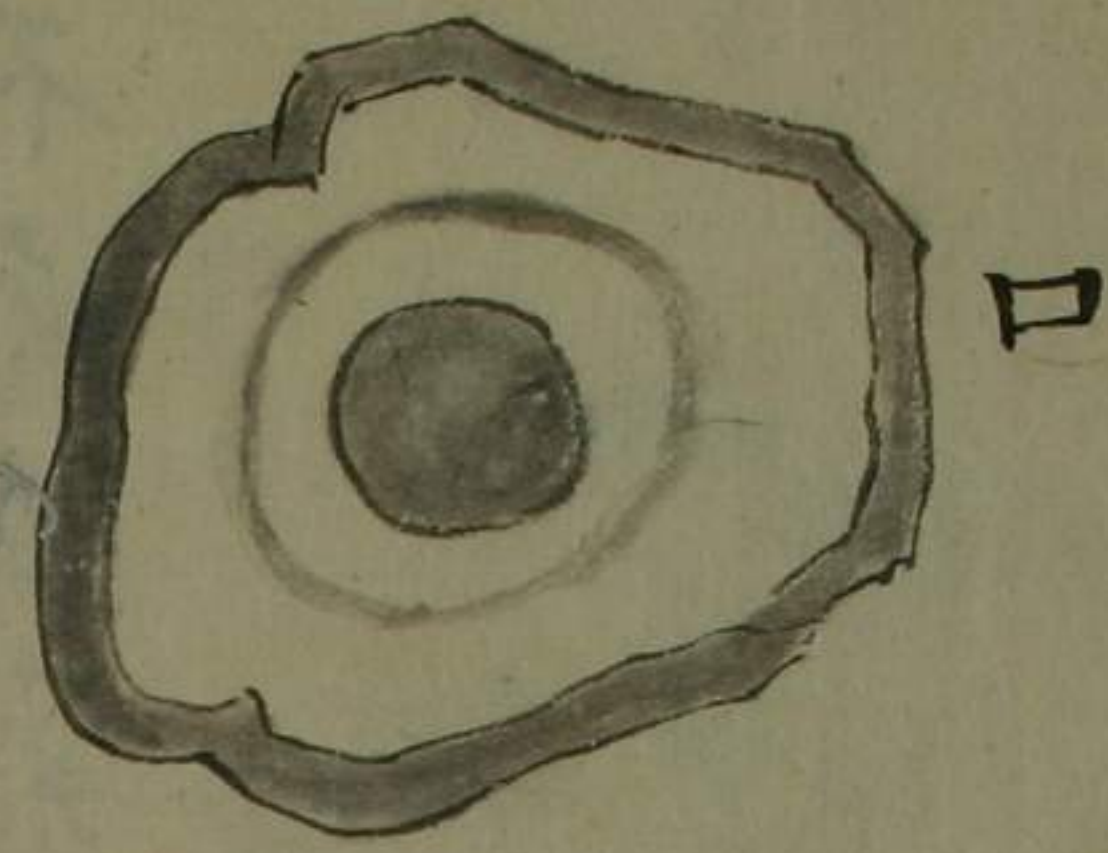
○尾代物池花両宮二月廿二日 女一は 是は古赤を今中津赤瓦物と云
 日終の物ありふに 是赤瓦を今中津赤瓦物と云ふは 是は古赤を今中津赤瓦物と云ふは
 あり形凡^口 ありして 巨大小古赤物も 今中津赤瓦物と云ふは

○中津の赤瓦と神谷久藏物と云ふ物も 古色
 あり同^口

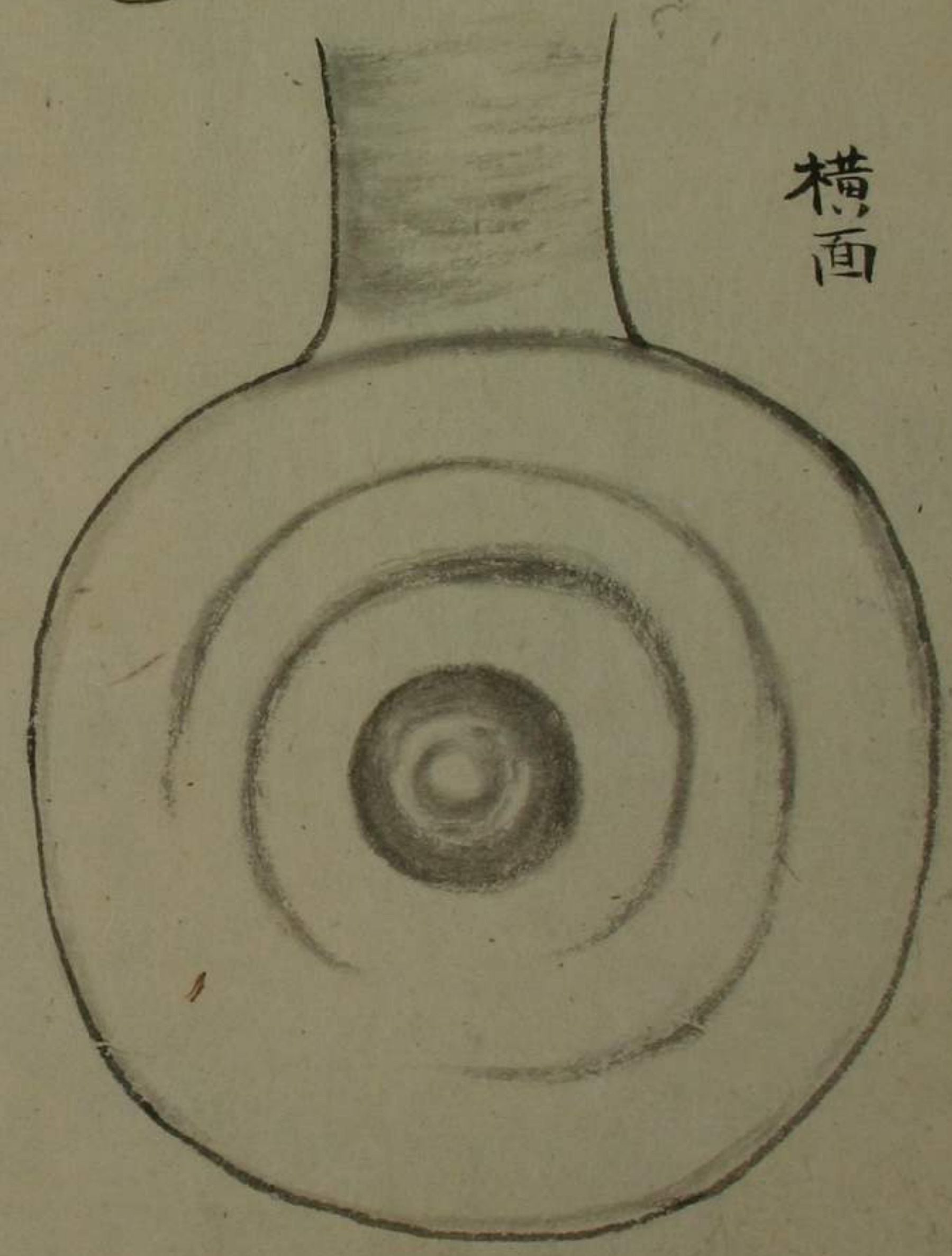
○右所^口 信濃白土流も 一類を物と云ふは 是は古
 松山^口 物と云ふは 是は古
 赤瓦物と云ふは 是は古
 の信^口 ありて 是は古

中津藩人
 神谷久藏 所藏





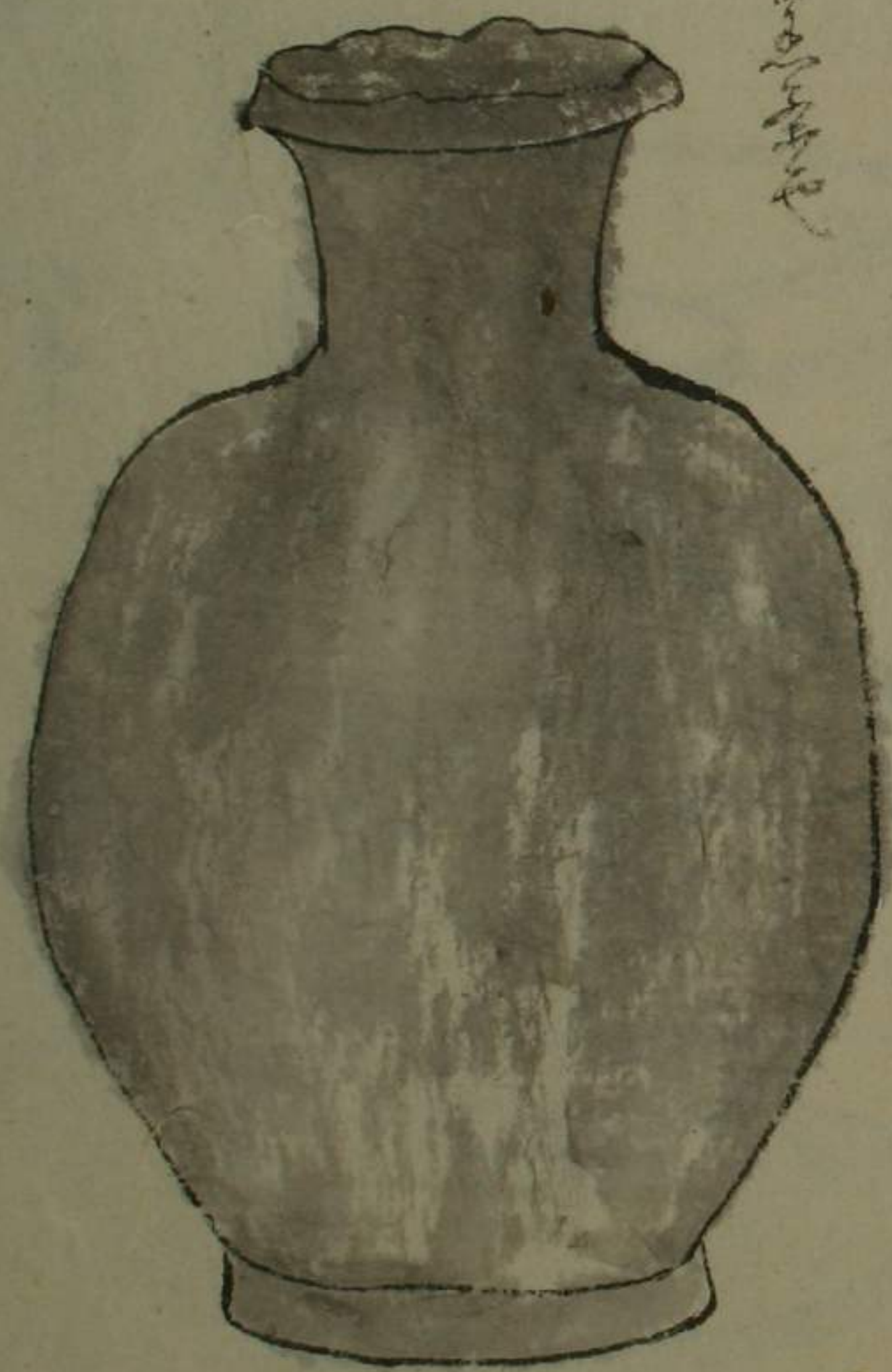
口



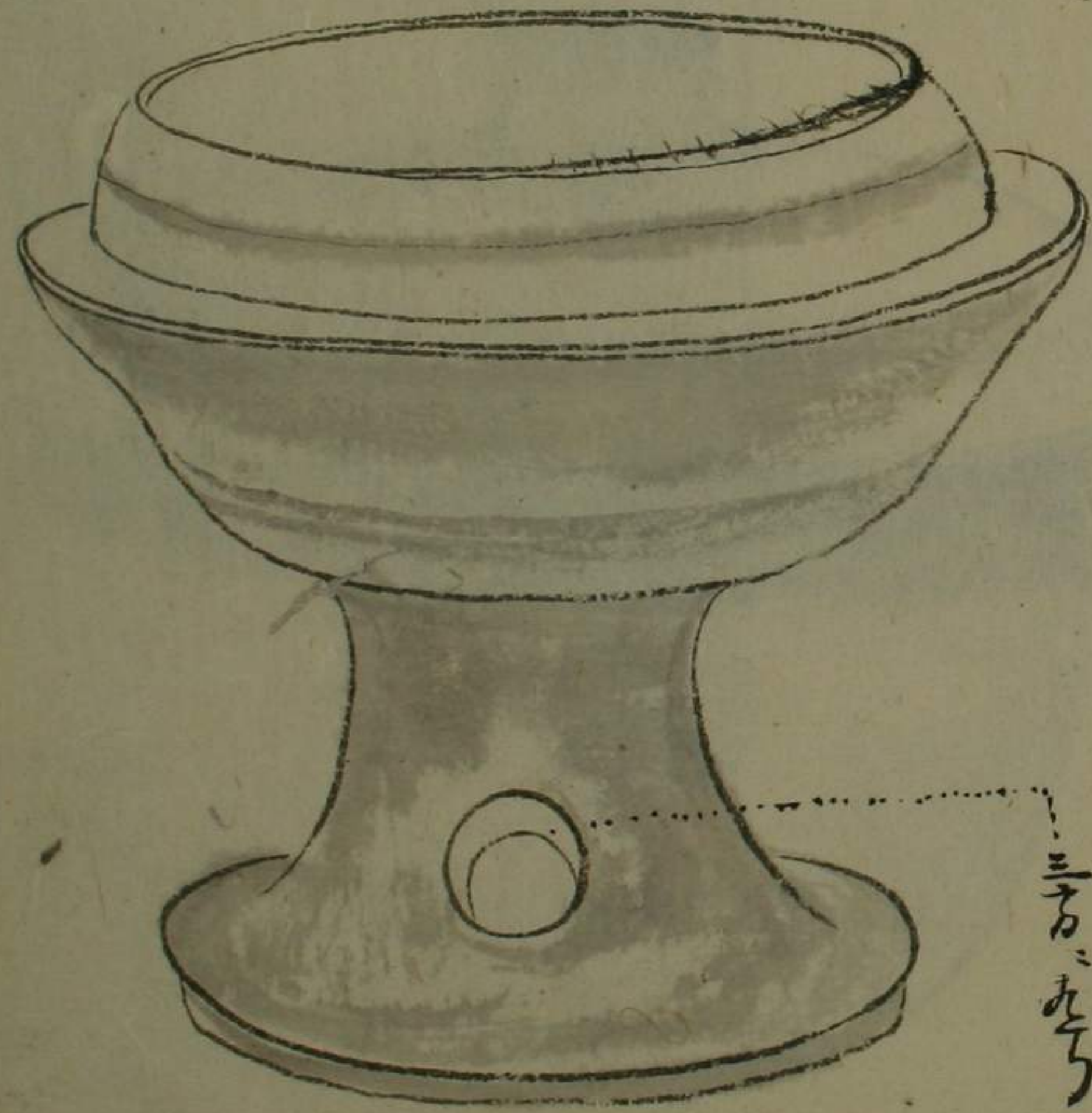
横面

母波幸田部國分村國分寺
境地所出

五三三也



天
寶
列
天
狗
名
所

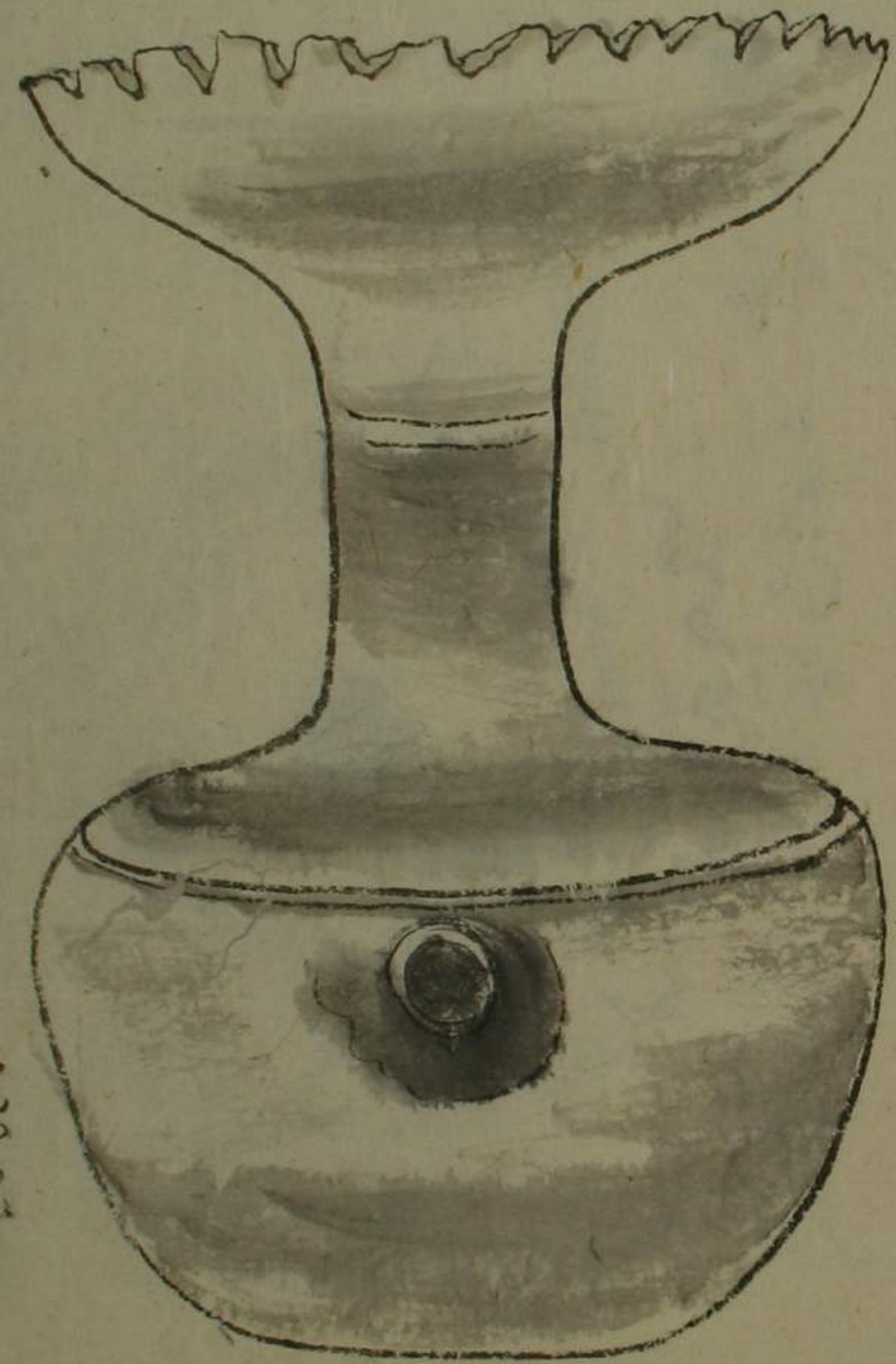


三
方
五
寸

天
寶
年
天
香
山
所
藏
存
在
先
存
子

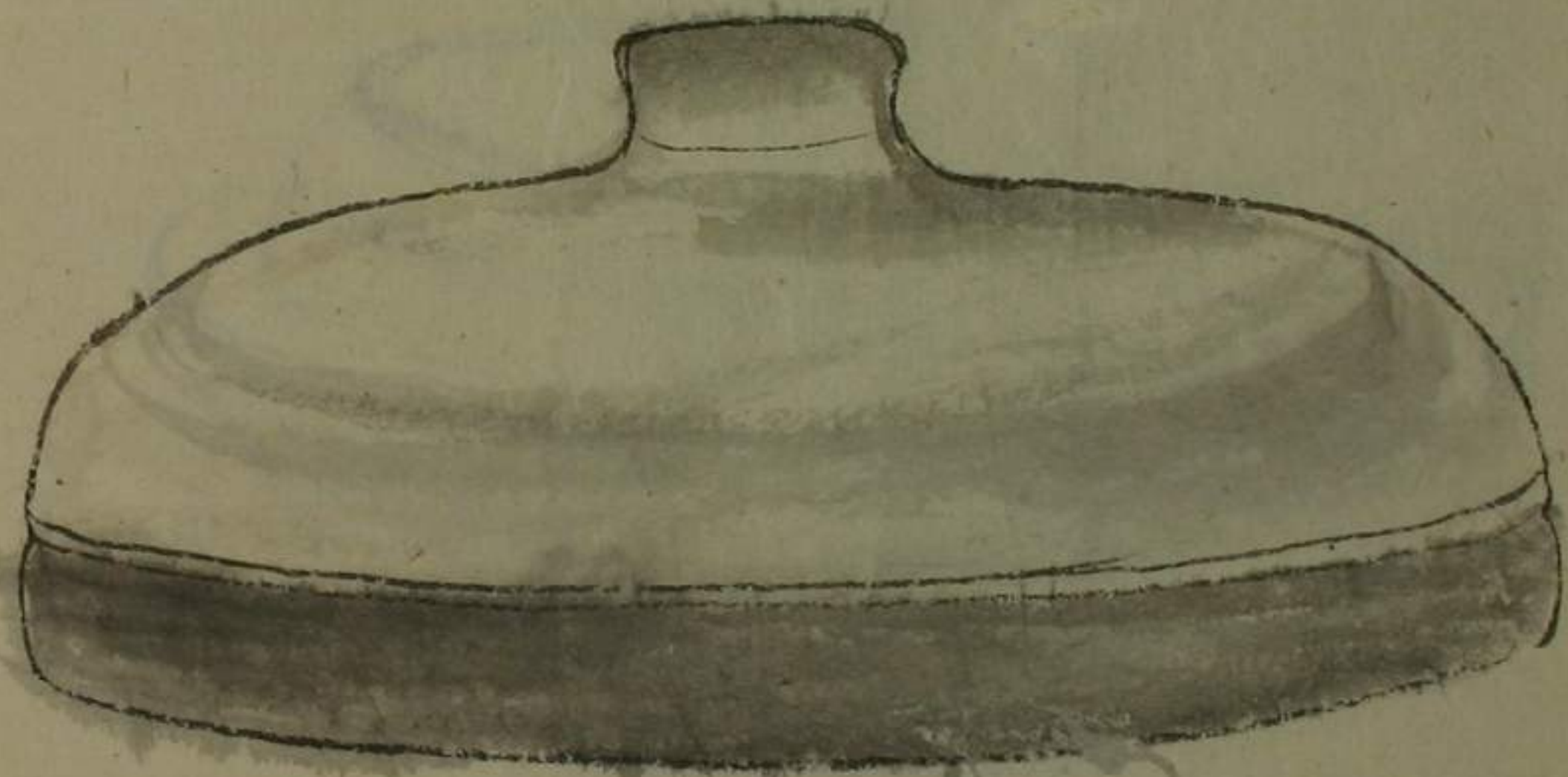


之列
銀器
小
應
野
村
本
所
獲

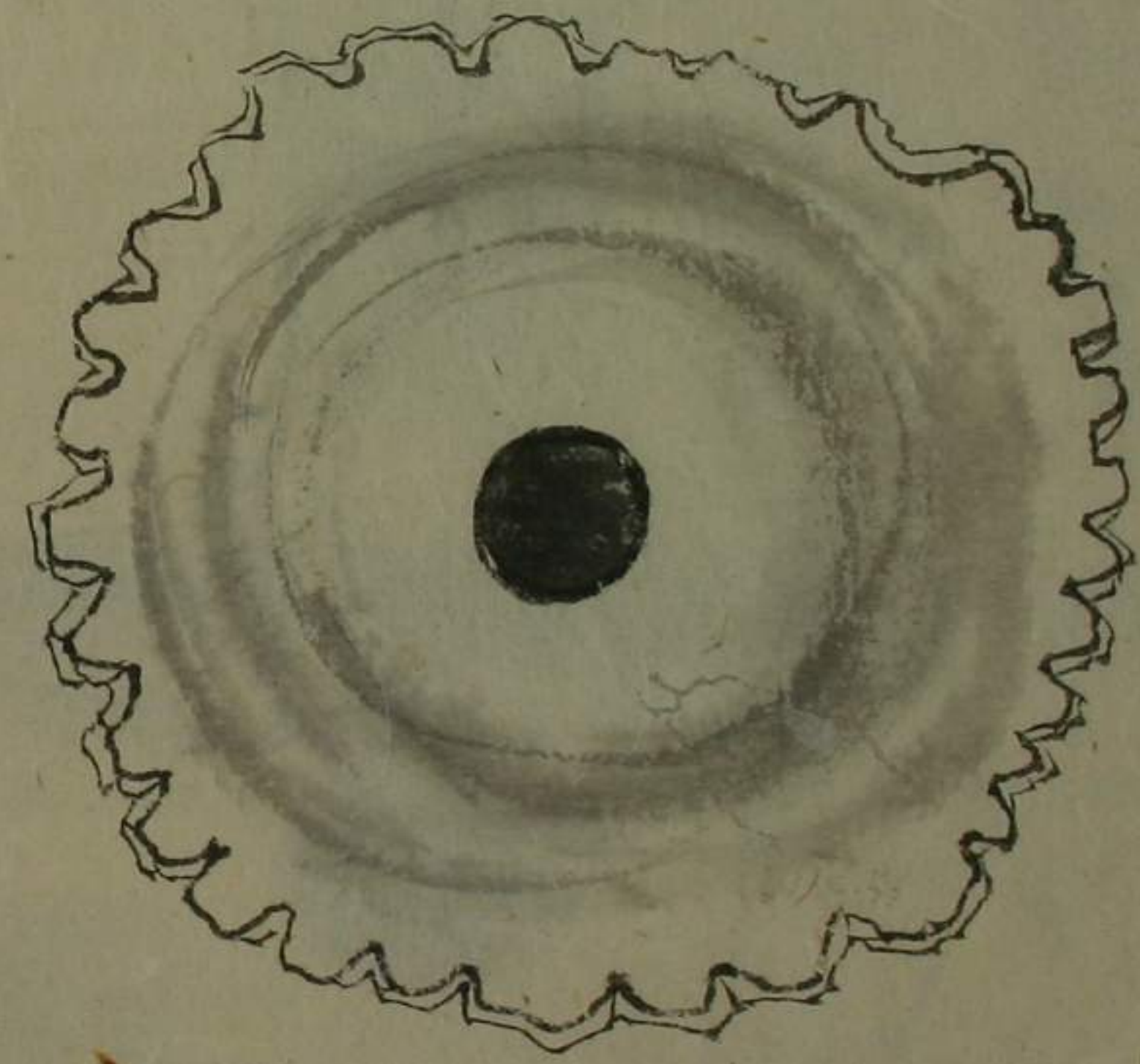


三
五
六
七

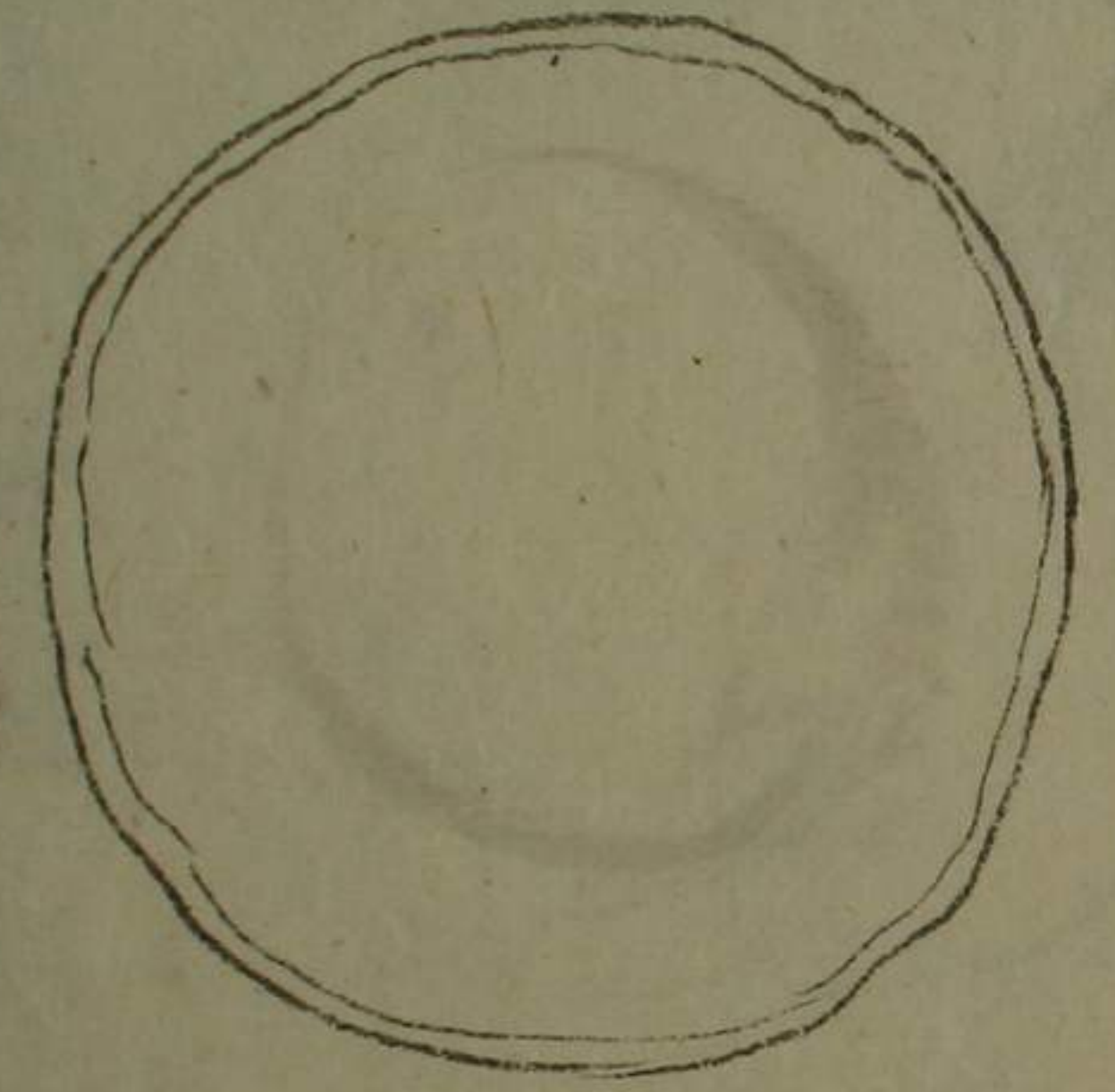
廿
五



小石

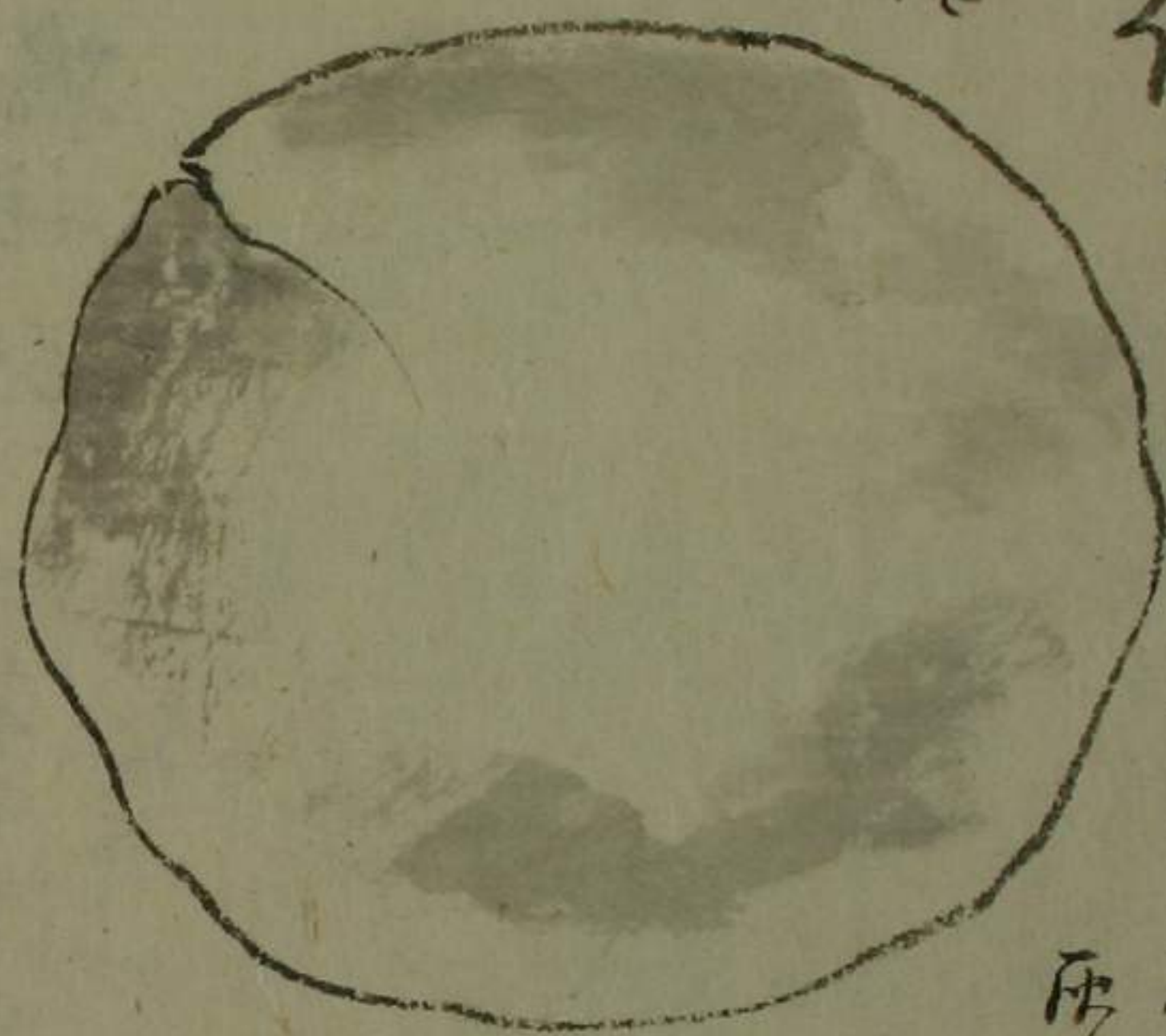


但馬國城崎部
湯島温泉下所出石散



和別著信文珠山中所得

正色



正色

側面

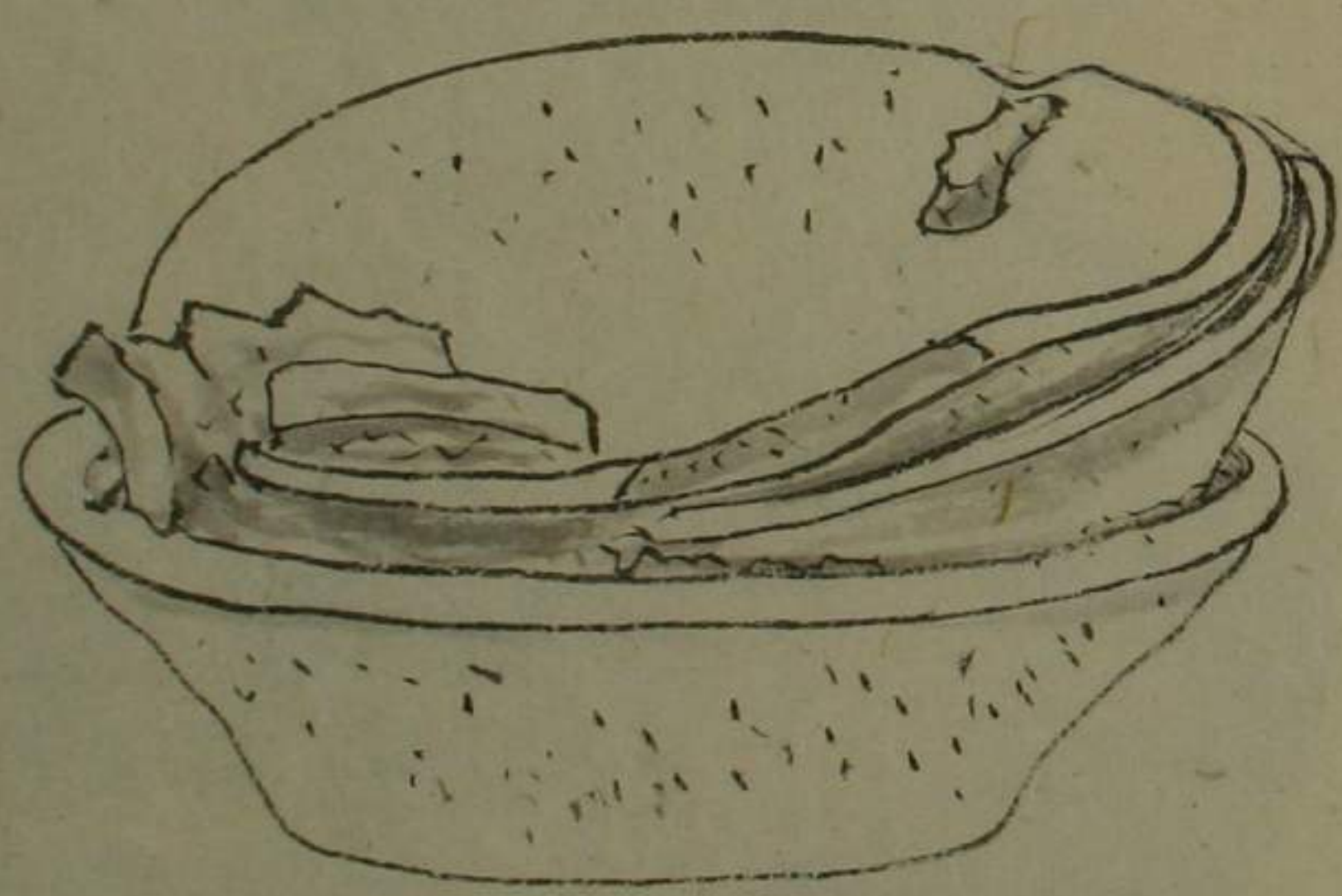


展列階入石白鏡

山口

正色

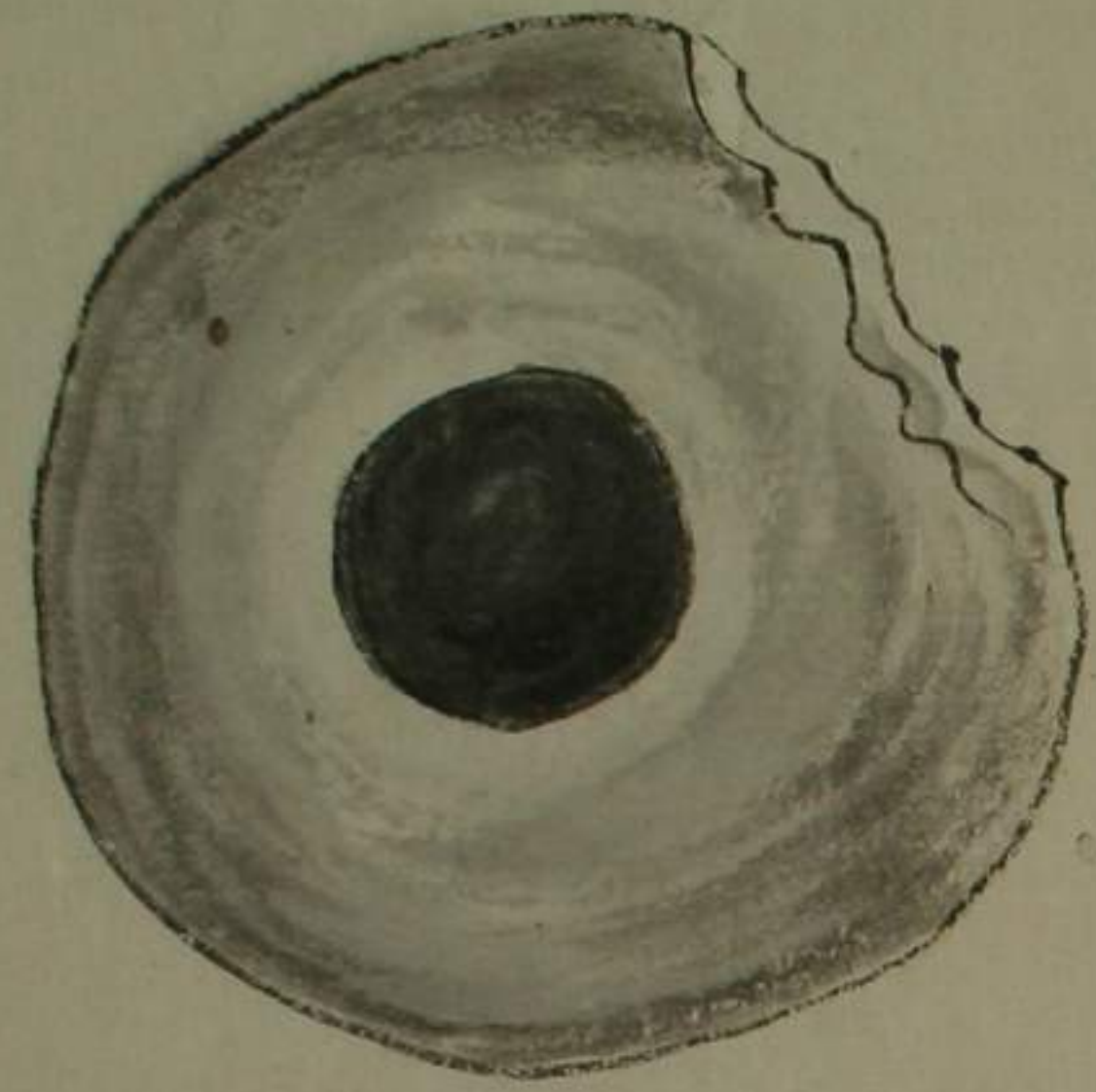
正色



右之為藏古陶大瓶圖

高崎藩山本左輔藏

上列 新徳川村海



戊寅四月廿芝蘭堂主贈リ今家藏下九

丁丑臘月廿六日第一番校了

三十一葉

Handwritten text on a slip of paper, likely a library or archival label, written in cursive Chinese characters. The text is oriented vertically and appears to be a record of the book's acquisition or classification.

此種より疎洞を造

り好雨を求む花柳を恨

了るは世に多かる

恨の中より命を惜む

齋房を後へんは

くは世に多かる

自らをいふは

左海より

甲古、京新

所信句珠重の瘡人

よき事なり

去後

のわな

船井郎宋村

不句珠重入地

相の秋白

之能

守月

A19-34 a2

之能宗沙也

宗月也 米董

宗月也

属人花瓶

小瓶也

母天来也

台形也

小字也

一以年也

宗月也

小瓶也

法利也

之也

一也

下也

以也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

高誘の地記に及ぶ

子年ふく

山原多野村

公五ふふ

月一木大株

破抄

州

去

あ

定

定

河

尾

水

水

海

水

所

い

道

聖水

大



